

Title	分詞構文における Figure / Ground 性についての一考察
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	Osaka Literary Review. 31 P.10-P.22
Issue Date	1992-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25491
DOI	10.18910/25491
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

分詞構文における Figure / Ground 性についての一考察

早瀬 尚子

1. 序

この小論では英語におけるいわゆる分詞構文と呼ばれる言語表現に焦点を当てる。分詞構文とは(1)に示されるような事態を定動詞を一つだけ用いて表す表現である。

(1) カンテラが掛かっていて明かりがついていた。

- a. A lantern hung from a peg, giving light.
- b. # A lantern gave light, hanging from a peg.

おもしろいことに、(1a)(1b)に見られるように「掛かっている」と「明かりがついている」とでどちらを主要動詞に採用するかには不均衡が見られる。

分詞構文は動詞一つを含む「単文」で表される。一見簡単な操作でつくられそうだが、ここには重要な認知作用が働いている。というのも、二つの文で示されるということはそこには簡単にいえば二つの動作や状態が描かれていることになるからだ。これを単文で表すとは、その二つの動作、状態をあたかも一つのものであるかのようにまとめ、融合した形で描写するということになる。この融合という形は、いわば話者がその状況を新しく再構成し、その二つのうちどちらかに優位性を持たせることで成立する。

この小論は、この融合が行われるための要因について考察を加えるものである。従属節なら何でもこの構文に書き換えられるわけではないこと、この構文のプロトタイプは、ある事態の側面に着目し、もう片方の事態は付随的な「状態」とみなされるということ、またそのような再構築に状況的もしくは認知的にそぐわないものはこの構文になじまないということを示したい。

2. Langacker (1987,1991)

Langacker (1987,1991) では認知文法の立場から進行形に現れる *-ing* について意味的な規定を行っている。それによれば、*-ing* の果たす役割は、①完了動詞を非完了なものに転換し、¹⁾ ②元々の process の両端を除き、③その内部を等質的なものとみなす、ことである。

- (2) a. He is drawing a picture.
b. He is fighting his way into the end zone.

これらは動作の完結点を除いた内部状態に言及している進行形の典型的な例である。そして know、see 等もともと非完了な状態を示す動詞は更に *-ing* を加えて非完了に転換するのは冗長であるため、進行形に現れないのだと説明している。²⁾

但し この見方では、*-ing* が名詞を修飾する場合 (anyone knowing his whereabouts 等)、もしくは本論で扱う分詞構文の場合に、knowing など本来なら *-ing* 形にならないものまで現れることを説明できない。

Langacker 自身もこれに気がついていたようで、形容詞などは 'atemporal'³⁾ であることとの平行性を指摘し、名詞を修飾するという目的のためには atemporal にすることが必要であり、*-ing* 自身の派生するものはまさにこの atemporal relation であると主張する。

本論で扱う分詞構文も同様の見方ができる。分詞構文は文修飾副詞としての働きを担っており (cf. Quirk et al. (1985) : 15 : 25)、副詞も atemporal relation なので、二つの動詞のうちどちらかを *-ing* を用いて atemporal にすることで、その節は状態を表す文修飾副詞として機能することになる。

3. 事態に基づく選択

まず、*-ing* との関連から最も進行形の意味に近いと思われる例からみてもみよう。

- (3) a. Painting a picture, Marson's physical eyes are half-closed, while his mind's eye is wide open. [BC]
 b. Finishing the letter, she was wondering whether to post it or not.
 c. He stood at the door, staring at her.
 d. Offering a prayer, she was thinking about Bill.
 e. Looking around slowly, he saw a marble fireplace, a low bookcase of mahogany with criss-crossed brass wire instead of glass panes in the doors. [BC]
 f. Walking along the beach, I collected a lot of seashells.

これらに共通するのは、分詞の用いられる句（以下Xと表す）と主節（以下Yと表す）とが両方とも（幅のある）状態を示すことであり、Xという状態の間、Yという状態だったという解釈になる（cf. Fig. 1）。Yに現れるのはもともと atemporal な状態を示すものである。ただ、(3f)ではその状態がかなり薄れ、持続的動作を表す activity となっている。貝を集めるという動作は一つ一つ拾っていく動作を幅を持ったものとしてまとめて見ていくと考えられるので、次にみるYが状態ではなく時間的に境界をもつ出来事を表す例と連続性を成している。

- (4) a. He died driving in the Mille Miglia automobile race of 1957. [BC]
 b. Walking along the street, I met her.
 c. Knowing that he had no choice but to ask me, I accepted his request.

これらを簡略化すれば X という状態の間に Y が起こるということになる (Fig. 2)。

< Fig. 1 >



< Fig. 2 >



さて、ここまでは接続詞などを用いて書き換えた場合に *-ing* がほぼ進行形と同じように解釈されていた例だった。次からは、Xが進行形の意味とはかけ離れてくる。進行形ではその process の両端が除去されていたが、以下にみる例ではむしろその両端の一つである終点に言及されている。

- (5) a. Offering a prayer, she went to bed.
 b. Finishing his homework, he went out for a walk.
 c. Climbing the steps steadily, they reached the top. [BC]

「祈りを捧げ終わってから眠った」「宿題を済ませてしまってから散歩に行った」というように、Xの動作は完結し、その完結した点でYが生起している。特に (5c) の *climb the steps* はそれ自体は完結点を特に持たない activity を示すが、Yが瞬間的、点的な動作を表すので、完結点を持つ解釈を受けると考えられる (Fig. 3)。

次の例はYが点的、瞬間的な出来事を表し、Xが状態を示すが、(5)の例と異なるのはYはXの状態の、終点ではなく始点と同時に生起していることである。Fig. 4 を見るとその違いがよくわかる。

- (6) a. A lamp suddenly went out, leaving us in utter darkness.
 b. The poor lady died, leaving three children behind.

< Fig. 3 >



< Fig. 4 >

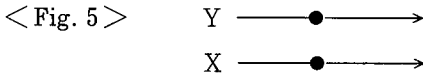


最後はYだけでなくXそのものが点的な動作を表す場合である。この時、XとYとのつながりは緊密なもの (*immediately after*) と解釈されなければならない。

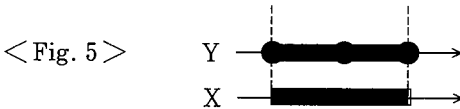
- (7) a. Looking back, she threw a kiss to me.
 b. Clicking into place, the parts suddenly ceased to move.

- c. Stopping the car at a fork in the road, he got out. [BC]
 d. Reaching the top, we did see the other side of the mountain.

(7d) では主節 Y に現れる強調形 *did* がその瞬間性を表している。このことを考えると、X (山の反対側を見る) も一種の点的な事態つまり登ると突然視界がひらけたというその転換点に焦点が当てられているといえる。



さてこれらに共通してみられるものは何であろうか。これまでの例とその表す事態との関係の図式を見てみると、次のことに気がつく。それは [X-ing, Y] [Y, X-ing] において、Xの時間的幅の範囲内にYが生起しているということである。



特に(3b)と(5b)を比較したい。どちらも同じ *Finishing* を X に用いているが、(3b)では Y が状態を示すので *Finishing* も同様に幅を持った解釈(「終わらせながら」)がなされ、言及されているのはその完結点、達成点を除いた内部状態となるが、(5b)では Y が動作であり、その時間的な始まりの点を持つので、言及がなされるのは *Finish* の完結点であり、「終わらせるとすぐに」の解釈が出る。つまり、Y よりも時間幅が狭くなってしまうような言及を X が行わないように解釈がなされることがわかる。このことは (3d) (5d) の *Offering* の解釈にも言える。

(3d) *Offering a prayer, she was thinking about Bill.*

(5a) *Offering a prayer, she went to bed.*

(3d)では動作の終点にたどりつくまでの状態つまり幅に、(5a)ではその幅

の終点に言及している。この差は主節の表す時間幅に相對したものとなっている。

この規定に基づけば、例えば次のような現象が説明できる。

(7a) Looking back, she threw a kiss to me.

(8) a. # Looking back, she went away.

b. Looking back many times, she went away.

Look back は瞬間的動作である。その時間内に(7a)のように「投げキス」をすることは自然に想定できるが、(8a)の「でてゆく」という動作はその時間幅におさまらず、不自然である。それに対して、(8b)の many times に示されるように、瞬間的動作を反復して幅を持たせてやれば容認できる。

この時間幅が重要な要因であることは(8a)を次の例と比較すればよくわかる。

(9) Going away, she looked back once. (cf. (8a))

「一度振り返る」というYは瞬間的、それに対してXが幅を持つという、規定にあった形になると全く問題はなくなる。つまり、Xの時間幅よりもYの時間幅の方が広い場合は良くないことになる。

同様の説明が次の例にも当てはまる。

(10) a. When he came to Baltimore, he was leaving the team.

b. # Coming to Baltimore, he was leaving the team.

Xが「バルティモアにやってくる」という点的動作を表す一方、Yは進行形で表された「チームを離れようとしている」という状態であり、「Yが状態であればXもそれに付随する状態として解釈」できないことになる。

また、この規定によって現れる同時性、つまりXとYとは何らかの形で同時成立的であるという要因は、次のような現象にもよく現れている。

- (11) a. # (After) Running this morning, he was very tired this evening.
 b. # (After) Signing a motion-picture contract, she came to America.

接続詞 *after* の補助を用いて時間関係を明確にする方が(11)は自然になる。⁴⁾単純に分詞だけが用いられていればその解釈は主節 Y の時制に頼らざるを得ず、同化してしまうことになるが、その傾向と(11a)の副詞句 *this morning/evening* や(11b)の地理的な状況(アメリカとその他の土地)とが乖離しているために全体としての文が認められなくなるのである。時間的同时性が見られない場合、その関係を明示化する接続詞が要求されることになる。

このように、Xの時間的幅内にYが生起することが分詞構文を容認するために必要である。この対立は Figure/Ground の現象と共通性を持つ。Ground は等質的で拡がりを持ち、Figure はその中に置かれた形をもったものである。Figure となったものはその背後に拡がる Ground と重なっており、これが分詞構文での同時性と平行しているのがわかるだろう。

但し、同時性を示していても(12)のように分詞構文に書き表すことができない例もある。

- (12) When I was reading the newspaper, someone knocked the door.

同時性は一つの大きな要因であるが、更に他の要因も考えられる。この可能性については5節で考察する。

3. 話者の認知に基づく選択

これまで、XYのアクベスト差が Figure/Ground を強いる例を見てきた。二つの出来事のどちらかを Figure とし、片方を付随的な Ground にして一つにまとめてしまうのだが、XはYよりも幅をもつという時間的広がりから見ると、YをXという Ground に対する Figure として見立て易

いことになる。

ところでこのようなアクペストの差がない、つまりどちらも状態を示す場合は、二つは言ってみれば対称的である。この場合、どちらを主体、どちらを付随的に見るかは話者の選択に任され、Figure/Ground の反転の可能性が出てくる。

ここで冒頭にみた例を見てみよう。

- (13) Mike crawled to the door and peered in. The orderly room seemed to be deserted.
- a. A lantern hung from a peg, giving light. (= (1a))
- b. #A lantern gave light, hanging from a peg. (= (1b))

どちらも状態を示す事態であり、前節での Fig. 1 に相当するが、X Y の割り振りには不均衡がみられる。まず物理的な外界との位置関係を特定して Y で表す。特にここでのカンテラの位置は可変性が非常に低い。それに対して「明かりがついている」というのは可変的である。明かりは消えている場合も考えられるからで、絶対的なものではない。

このように、可変性が低いものが Figure として Y で表され、暫定的な事態を表すものが Ground として X で表される傾向がある。主語が無生物であればその位置関係は半永久的であり、その場合にこの傾向はよりはっきり表われる。

- (14) a. A grandfather clock stands at the corner, still telling the exact time.
- b. #A grandfather clock still tells the exact time, standing at the corner.

しかし、この X、Y の偏りは決定的なものではない。

- (14) c. A small lantern gave off an eerie light hanging on a peg high up on the wall.

普通ではない異様な明かりを出しているという意外性、異常性によりそちらの方に注意が引きつけられた結果、give light の方が Figure として働いたと考えられる。

- (14) d. The lantern gave ample light, hanging (, # as it did,) from a high peg.

定冠詞と as it did の働きに着目したい。そのカンテラがお馴染みのものであり、昔と変わらずその場所にあるという認識が、ただの明かりでなく *ample light* だという認識と相対して、Ground になると考えられる。

このように、話者がどちらに着目して事態を捉えているかで Figure / Ground の転換が起こり得る。ただ、その転換がかなり自由に行えるものと、先ほど述べた傾向に制約される場合とがある。

- (15) a. She sat listening to that pianist's performance.
 b. # She listened to that pianist's performance, sitting (in the front row).

「座る」と「聴く」とではどちらも状態ではあるが、可変性は「座る」の方が低く、よってより自然なのは(15a)である。但し、

- (15) c. She listened to that pianist's performance, sitting in the front row to see her technique.

目的を表す句を加えることで「聴く」ことに力がいれられていることが明確になり、そちらの観点を Figure にとって一つにまとめて表すことが自然になる。

次の場合はそれほどの不均衡は感じられないようである。

- (16) a. The poor little boy ascended the stairs, crying for his dearest mother.
 b. The poor little boy cried for his dearest mother, ascending the stairs.

主語は有生物（人間）であり、どちらの動作も可変性にそれほど変わりがなく、当面の暫定的な状態を表すことになり、対称性が高いからである。先ほどのカンテラの例ではその可変性における対称性は低いので、hang という状態が優位だったのである。

このように、XもYも同様な状態の場合、対象自体は全く同じ状況でも、その時の話者の認知状況により Figure/Ground の逆転現象がみられる。ここまでを振り返ると、何をXとしYとするかの決定に重層的レベルが考えられる。まず事態の性質に基づく選択がなされる。XはYと同時性を持ち、且つYよりもその時間幅が狭くならないように選択される。この段階で決定されないものは、その事態のもつ対称性の度合いと相対して、話者の認知状況というもう少し広いコンテキストに影響されるようになってくる。

4. *-ing* の拡張

分詞構文の容認できる状況要因について見てきたところで、初めにみた Langackerの *-ing* の規定に立ち戻ってみよう。進行形の *-ing* の規定は①完了動詞という temporal process を非完了である atemporal relation に転換し、②元々の process の両端を除き、③その内部を等質的なものとみなすこと、であった。

この規定と、これまで見てきた *-ing* とは必ずしも一致しない。特に②③は適用できない。完結点、達成点というその出来事の終点が言及される例は多々あったわけで、この点では二つの *-ing* 形は全く同じものとは言えない。しかし①においては共通している。つまり、atemporal relation を派生し、典型的には状態化した形となり、文を修飾するという点は保持されている。この意味で分詞構文における *-ing* は進行形において規定された *-ing* からの拡張として位置づけられる可能性がある。

5. EVENT とまとめ

二つの異なる出来事が一つのまとまったものと捉えられるための決定的要因にはXとYの同時性及びアクペスト性があり、話者の認知状況によっても左右されることを見たが、その他にも言語外的な要因が絡んできている。ここで少しマクロ的な視点をとって、出来事の捉え方と融合性の関係に着目したい。

出来事を見る視点が統一されていることは融合するための重要な要因である。

(17) When I was reading the newspaper, someone knocked the door.

(17)ではそれぞれの出来事が独立したものと捉えられている。同時性はあるものの、一つのこと（例えばIについてのこと）を述べたものではないので融合しにくく、この文に対応する分詞構文は見つからない。

(18) When Mary kissed Bill, he got angry.

(18)に関しても同様で、Maryの側から見た出来事と、Billの側から見た出来事の二つは各々独立したものと捉えられていて、それが接続詞 when でつながれているのである。

これらの視点のとり方を統一することで、ひとつに融合できる可能性が出てくる。⁵⁾

(19) Reading the newspaper, I heard someone knocked the door.

(20) a. When Bill was kissed by Mary, he got angry. (cf. (18))

b. Being kissed by Mary, Bill got angry.

特に(20)のように、(18)と客観的状況は同じでも捉え方が異なれば一つのまとまった出来事として分詞構文に表すことができる。これは出来事をどう理解するかという認知的側面が大きく関わってくることを示している。

また、視点を統一してもそこに原因結果などの因果的な連関性がなければ適切にはならない。

(21) Being a teacher of American Literature.

- a. I remembered Whittier's "Massachusetts to Virginia". [BC]
- b. # I lived near the river.

ここには XとYとのアクベストの整合性も同時性も存在するが、この同時性は3節でみてきた同時性よりは希薄なものであり、よってまとまりとして捉えるにはもっと強いつながりが要求される。ここでつながりが強く意識されるとは、二つの出来事間に因果的連鎖がとらえられ、一つの出来事として再構築できるということである。(20a)では「アメリカ文学の先生」であるなら「Whittier の作品をよく知っている」ことになるという連関性がみられるため分詞構文全体として自然に受け入れることができるが、(20b)ではそのつながりが不明であり、これだけでは容認性は低いものとなる。

どんな従属節でも分詞構文になれるわけではない。そこには少なくとも統一した視点がなければならず、また連関性が強く意識されるほど二つの出来事をまとめた形で述べる助けとなる。これらはマクロ的要因の一つであり、分詞構文が単なる機械的な操作で生まれるのではなく、外界の捉え方を反映するものだといえる。

6. 結論

この小論では *-ing* 形の分詞構文に焦点を当て、この表現が二つの出来事をどちらかの側面から一つの出来事として再構築した産物であるという立場から、どんな状況でどちらの出来事に基づいてまとめるかについての要因を幾つか探ることを試みた。その選択には様々なレベルがあり、その出来事の事態特性によりその選択がほぼ決まってくるものと、話者の対象の捉え方、つまり認知環境に左右されるもののが、重層構造をなしていることを述べた。本論で挙げた以外にもこの選択を左右する要因の可能性、特に統語構造や情報構造との兼ね合い等の問題は残るが、その詳細については今後の研究の発展課題としたい。

注

- 1) 時間を通じた変化を含む process を完了、それ以外の process を非完了と考える。この分類は Langacker (1987) に準拠する。
- 2) 但し、目的語に何をとりかによって完了と解釈される例も挙げられている。詳しくは Langacker (1987) 7章参照。
- 3) Langacker (1987) に従う。
- 4) 但し時間的差異が大きくてもまとめて描写することは可能である。この場合過去分詞を用いて先に起こった事態Xの完結した最終状態 (cf. Langacker (1987) による過去分詞の定義) がYの生起と同時に重なっているとみなす。
Having offered a prayer, she went to bed. (祈りを捧げたのは二時間前でも良い)
Having run in the morning, he was very tired in the evening.
過去分詞を用いた分詞構文についてはここでは詳しく扱わなかったが、稿を改めて論じることにした。
- 5) Lunch finished, they went down to the lounge のように、視点が統一されていない例もあるが、過去分詞を用いているので本稿の考察の対象から除外した。この種の例は本文での視点の不統一の例とは違い lunch と they との間に明らかに不均衡な関係がみられる。

主要参考文献

- Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge University Press.
- Haiman, J. (1985) *Natural Syntax*. Cambridge University Press.
- Langacker, R. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1. Stanford University Press.
- _____ . (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 2. Stanford University Press.
- Quirk, et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Talmy, L. (1978) 'Figure and Ground in Complex Sentences.' in Greenberg, J. H. (ed.) *Universals of Human Language*. Vol. 4. Stanford University Press.

引用文献

- A Standard Corpus of Present-Day Edited American English (Brown Corpus) [BC]